

令和四年

七宝会 第三回 定例公演

君を守りの神は千代まで
栄うる御代とぞなりにける

吹き合はすめる笛の音を
引きとどむべき言の葉もなし

能「岩船」辰巳 和磨

狂言「舟船」茂山 宗彦

能「小督」山内 崇生

◆九月十日(土) 午後一時半開演
◆枚方市文花芸術センター 関西医大 小ホール

最も古典にして、
最もアヴァンギャルドな芸能
能楽をみなぎりに

七宝会

令和四年 七宝会 第二回定例公演



【解説】

◇ 能「岩船 いわふね」

勅使(ワキ)は摂津国住吉の浦(今の大阪市住吉区)に、新しく浜の市を立て、高麗や唐土の宝を買取取るようにという勅命を受ける。勅使は、そこで唐人姿で、大和言葉話す一人の童子(シテ)に出会う。童子は勅使に、御代を讀えに来たのだと述べ、携えてきた銀盤に乗せた宝珠を、帝への捧げ物として託す。そして、天からの捧げ物を積んだ天の岩船が漕ぎ寄せてきたと勅使に教え、童子は岩船の漕ぎ手の天の探女であると正体を明かし、嵐と共に姿を消す。やがて海中から龍神(シテ)が現れ、自分は神を敬い君を守る者だ、天の岩船を守護する役目を担っていると告げ、岩船が住吉の浦につく様子を見せる。龍神は天の探女と協力しつつ、波の鼓に拍子をそろえて岩船を引かせ、さざ波や松風の力を使い、八大龍王の方も得て、住吉の岸に岩船を着け、金銀珠玉を山のように積み上げる。こうして天下泰平の御代は永久に続くのであった。

◇ 狂言「舟船 ふねふな」

西宮見物に出かける主人と太郎冠者。神崎の渡しに着くと太郎冠者が「ふなや」と舟を呼び、主人は「ふね」と呼べとたしなめるが、冠者は古歌を引用して「ふな」が正しいと言いつ張る。主人も別の古歌で対抗して互いに「ふね」だ、いや「ふな」だと言いつ争うが...

◇ 能「小督 せうとく」

平安末期、平清盛の権勢に恐れて出奔した愛人・小督局(ツレ)は琴を弾き、天皇を慕って「想夫恋」の樂を奏でていた。そこへやって来た仲国。かねて局の琴の音色を聞き覚えていた彼は、琴の音を便りに尋ねて来たのだ。天皇の手紙を渡す仲国へ、自らの想いを吐露する局。そんな彼女を慰めるべく仲国は酒宴を催し、局の思いに寄り添うと、彼女の言葉を天皇へ届けるべく、都へ帰ってゆくのだ。

◆ 令和四年 七宝会年間会員について

年会費 13,000円 (第一回第二回第三回の三公演分含む、普及公演は1,000円割引)

※普及公演は別途ご購入ください。

※会員の方は普及公演は第一回公演時よりお申込みいただけます。

※一般の方は第二回公演時よりお申込みとなります。

年度途中からでも会員に申し込み可能です。

※防疫対策、席数制限など感染症対策をしております。

お問合せ・チケットお申し込み先

宝生流 七宝会

〒572-0009

大阪府寝屋川市末広町11-8 辰巳方

TEL 072-831-3206

FAX 072-832-5115

会場のご案内



枚方市総合文化芸術センター 本館 関西医大 小ホール 京阪電車「枚方市」駅から徒歩約5分

仕舞「花筐クルヒ」 澤田 宏司 仕舞「遊行柳クセ」 辰巳満次郎

能「岩船」

シテ 辰巳 和磨
ワキ 福王 和幸 大鼓 大村 滋二 太鼓 中田 一葉
ワキツレ 中村 宜成 小鼓 久田舜一郎 笛 貞光 卓生

是川 正彦

間狂言 鈴木 実

太郎 茂山 宗彦 主 茂山千之丞

シテ 山内 崇生

局 石黒 実都 大鼓 山本 寿弥

トモ 柏山 聡子 小鼓 上田 敦史

笛 貞光 智宣

ワキ 福王 和幸

間狂言 茂山千之丞

◆ 日時 令和四年 九月十日(土)

午後一時 開場 午後一時半 開演

◆ 会場 枚方市総合文化芸術センター 本館 関西医大 小ホール

〒573-1191 大阪府枚方市新町2-1-60

◆ 料金 一般 5,000円 学生 2,000円 (全自由席)